

俺とオレ

くさよなら大嫌いな自分く

著 藤浦 隆雅
東 一輝

プロローグ

繋いだ手を離されて初めて、その手が大きくて温かかったことに気づく。行き場をなくした俺の小さな手は空を掴んで不格好に揺れた。

「父さん？」

まだ幼い俺が慌てて見上げると、父さんが顔を背けたのは同時だった。

辺りは夕暮れ時で、俺たちの長い長い影は、夜の闇に紛れようとしている。俺には、どうして父さんがこんなところで突き放すような真似をするのかわからなかった。

ねえ、と小走りで追いつき力なくぶら下がった手に縋りつこうとしても、すぐに振り解かれてしまう。そして父さんの足は止まることなく前へ前へと進んでいく。俺は必死に足を動かすが、だんだんと距離は開いていった。

父さんが向かう先は真っ暗で何も見えなかった。追いつけずにいると辺りも少しずつ暗闇に覆われていく。背中を焼くような焦りと拒絶されたことによる胸の痛みでひどく息が上がった。

「父さんっ！」

遠ざかる背中はまだもうお前なんて必要ないと言っている気がした。足は根を張ったかのように地面から動かなくなり、俺はただひたすら父さんと呼び続けることしかできない。

遠くなつた背中が完全に闇に消え、気づいた時には自分の小さな息遣いだけがこの世界の全てになつた。俺はただ立ち尽くし、孤独感と恐怖に震えた。こんなところで見捨てられた。湧き上がってくるのは憎しみにも似た悲しみと、淋しさ。

それから俺は、強張る足を引きずつて暗闇の中を彷徨つた。どこまで歩いても果てなどなく、時折何かに躓きそうになつてはふらつく体を何とか立て直した。子どもの俺は、足掻けばいつか再びその大きな手に辿り着くと信じて疑わなかつた。しかし、歩いても歩いても俺は何も掴つかめない。

歯をくいしばつた瞬間、健太郎、と聞き覚えのある声がこの世界いっぱい響き渡つた。ハッと顔を上げると、真つ暗な空に光が差していた。自分の名が呼ばれるたびに世界は明るくなつていく。

——健太郎！——

行き場をなくして彷徨わせていた手が、誰かに力強く握られる。そして引つ張られるようにして俺は白い光の中に出た。